



企画・発行 日本赤十字社中四国ブロック血液センター 学術情報課 Tel 082-241-1619
協力 中四国ブロック内各赤十字血液センター



献血に伴う採血副作用対応への 取組みについて

血液事業の役割には、「安全な血液製剤の安定供給の確保」と同時に「献血者の保護」があります。全国では年間約488万人（平成27年度統計）の献血者の内、約1%に採血副作用が発生しています。主な採血副作用として血管迷走神経反応（以下、VVR）、皮下出血、神経損傷、クエン酸反応（成分献血のみ）などがありますが、VVRは最も発生頻度が高く7割以上を占めています。VVRの発生原因には不安感や過度の緊張、寝不足、空腹などがあり、症状としては気分不良、顔面蒼白、冷汗、嘔吐、重症になると意識喪失、痙攣などが起こります。献血者を重篤な事故から守るためにも、VVR未然防止対策は重要な課題です。

採血部門では平成25年度から全国採血副作用検討会を発足し、様々な取組みの結果、全血採血における「下肢筋緊張運動（下肢の筋肉を規則的に収縮させることにより脳への血流量を増加させVVRを予防）」及び「採血前の水分摂取」がVVR発生の低減化に有効であることが確認できたことから、平成27年10月には全国導入となりました。導入により軽症VVRの発生率は半減し、絶大な効果が出ています。今後は、重症VVRについての発生防止対策が課題であると思料されます。

献血に伴う採血副作用は未然に防ぐことの大切さは勿論ですが、発生した場合には迅速かつ誠意ある対応で献血者の安全確保に努めなければなりません。職員は、採血副作用発生時の対応等について定期的に教育訓練を実施しています。新人看護師や採血部門以外の職員が専門的知識を備え、迅速な対応を可能とするには、動画を挿入した教育訓練資料を用いることが容易に理解を深められるのではないかと考え、中四国ブロックでは「採血副作用発生時の対応DVD」作成に取り組みました。DVD作成の中心となったのは中四国ブロック内全血液センターの学会認定・アフェレーシスナースで、第1回目は、発生頻度の高い「VVRの対応について」をテーマにしました。

VVRの発生は採血中が最も多いですが、発生場所は、椅子に座った状態、採血ベッド上、休憩場所への移動中など様々です。そこで、採血前検査、全血採血、成分採血、受付・接遇の其々の特徴に応じた対応及び症状別の対応について実際の動きを撮影しました。この動画はパワーポイントの教育訓練用資料に挿入し、中四国ブロック内各血液センターでの新人及び定期的な職員の教育訓練に活用していきます。

今後は、VVR以外の採血副作用発生時の対応、採血副作用の予防及び回復時の対応、トラブル対応など、様々な場面における対応についてもDVD作成を検討し、採血副作用の対応について職員がレベルアップできるよう活かして

いきたいと考えています。そして、献血者が安全に安心して献血にご協力いただけるよう努めてまいります。

（中四国ブロック血液センター献血管理課 藤村和枝）



医療機関を対象にした職域献血



血液事業においては、血液法に定められているとおり、安全な血液製剤の安定供給が求められていると同時に、安定供給に必要な献血者の確保が必要です。

高知県では人口1,000人当たりの赤血球製剤の供給量が57.5単位(平成27年度全国平均50.4単位)と全国でも5番目に多く使用されています。この状況は、以前から続いており、供給量に基づく献血者確保に日々苦慮している現状があります。



病院担当者による職員への呼びかけ

また、都道府県別大企業数(中小企業庁,2014年統計)をみると、**全国の下位5県に中四国の島根・鳥取・徳島・高知の4県が入っており、大企業を対象とした献血者の確保は困難な実情があります。**高知県においては、人口当たりの病院数が多い背景から、企業の代わりとして医療機関へ献血バスの配車を行い、医療機関の多くの職員の方々から献血のご協力をいただきました。2016年の1年間で、県内55施設の医療機関に延べ85回の献血バスを配車し、2,000名を超えるご協力をいただきました。特に

高知市内にある近森病院(512床)では、年間200名近くの方に献血へのご協力をいただいています。

近森病院は、救命救急センターや災害拠点病院として機能するとともに、心臓血管外科領域では日本でも有数の施設として知られています。血液製剤の使用量が多い一方で、献血協力の活動として、院内輸血療法委員会が中心となり事前の院内広報から当日の職員呼びかけ等を自発的に行っていただいています。輸血療法委員会で献血について協議されている施設は数少ないと思われます。

この度、高知県合同輸血療法委員会においても、新しい委員会活動の一つとして“献血”を取り入れ、施設ごとに取り組む方針が決定しました。

医療従事者は、有限で貴重な医療資源である血液製剤のユーザーである一方、受血患者と接する機会も多いことから、輸血の重要性や輸血用血液製剤となる献血に対する理解がより深いものと思われます。中四国ブロック内で献血された血液は、中四国ブロック内で輸血を必要としている患者さんに日々届けられています。貴施設に献血バスがお伺いした際には、皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

高知県赤十字血液センター

献血推進課 小野 卓二、学術・品質情報課 北川 晋士

病院作成による院内広報資料